岸本裕史の理論・実践から受け継ぐものとは！！　連載4

学力研　常任委員長

深沢　英雄

１．岸本裕史の知的生産術

岸本裕史氏は､膨大な知識と博識をもち､しかもとても庶民的な人柄でした。岸本裕史氏の教師人生は日本の敗戦から始まります。今回は、何をどのように学んで、教師「岸本裕史」人間「岸本裕史」を形成してきたのか、源流を紹介します。

２、ラク勉のすすめ

岸本先生は、３０歳で組合の執行委員になりました。そこで教育文化部長になって、組合関係の勉強をだいぶしたそうです。でも系統的な勉強はせず、教師としての勉強もあまりしてなかったのです。当時の先生は、子どもの学力や能力のことよりももっと政治や経済の問題が大事だと思って、それを勉強しないといけないと思っていました。

日本の教育を動かす原動力は経済です。だから、経済をしっかりと勉強しようと、経済関係の新聞記事を細大漏らさず、岸本先生は毎日毎日ノートを書いていきました。

ルーズリーフノートに書いたものをファイルにされていました。岸本先生の家には分厚いファイルが１０冊ありました。そのノートを見せてもらったことがあります。「朝日新聞」や「日本経済新聞」「神戸新聞」などに載っている、その時々の経済政策や経済審議会の提言、財界の有力者の発言、個別産業の社長の言動や売り上げ高、生産高、株の動きなども、書かれていました。毎日家に帰ってから、夜８時から１０時ごろまでノートに転記したそうです。経済からはじめて、教育関係の記事にも広がりました。見せてもらったノートには、政府の文教政策、教育状況、教育イデオロギー、教育方法、教育内容、高校や大学、子どもやおとなの状況、幼児教育などを日付と、どの新聞に載ったかも書き添えてありました。小さな、丁寧な字でノートにびっしり書かれていました。ガリ版世代の岸本先生の字は、四角で読みやすい字でした。大事な記事は切り抜いて貼っていました。

ノートがどんどん増えていくのが楽しみになってきて、まるでラブレターを書くようになったそうです。ノートを５年続けました。経済関係のノートが４冊、教育関係が６冊でのべ１０００ページ以上あります。「義務的にやるギリ勉でなしに、好きでまさに趣味的にやった、楽しくやったからラク勉や！」と言っておられました。「石の上にも３年というけど、５年やったから、のちのち役立った。」とも。岸本先生は、５年間ノートを書き続けたことで、日本の経済や教育の動きが全体としてわかるようになったのです。

３、１００万部を超える隠れたベストセラー「見える学力、見えない学力」

１９８０年に大月書店から出版した「見える学力・見えない学力」は、１０万部を超えるベストセラーです。１９８１年に初版がでました。小学校の教師が書いた本でこれだけ売れた本はないのではないでしょうか。文庫本で４５０

円の値段でした。この本は国民文庫＜現代の教養＞教育・健康シリーズの１冊です。教師だけでなく、親・地域の教育関係者が読んだのです。岸本先生が亡くなられた後の偲ぶ会で「『見える学力・見えない学力』」を片手に子育てをしたんですよ。」と話をしてくれた方がいました。たくさんの方に支持されたこの本は、実践の中身や子育てへの提起が新鮮だったからです。

４、「見える学力、見えない学力」の文章の秘密

本は著者の主張を言葉を使って、読者に訴えものです。どんなに中身がよくても読者に読んでもらえなければ意味がありません。岸本先生の本は、読みやすいのです。内容は決してやさしくはありません。結構難しい言葉を使っています。でも、引き込まれて読んでしまうのです。

岸本先生に聞いてみました。「先生の文はとても読みやすいのですが、どんな文章修業をしたのですか。」「３つある。１つは、いい文章を写すこと。２つは、本をたくさん読むこと。３つ目は、詩を書く練習をしたからだ。」と答えてくれました。

「詩の練習？」「そうだ。ぼくの文は繰り返し、逆接、重ね書きでより印象づけているのが特徴だ。文のリズムとテンポを大事にしている。」「『見える学力・見えない学力』を例にとると、『学校の成績があまりよくないといわれる子どもに、いっしょうけんめいドリルを買い与えてやらせても、効果ははかばかしくありません』とあり、『学力の土台となる言語能力が貧しいからです』といっても意味は通じます。けれど、それをもうちょっとふくらませて、同じことを別の表現の仕方で書いているので。『塾へやっても期待はずれになります』ちがうような感じだけれど、同じ意味なんだ。それを協調していることになる。」と教えてくれました。

岸本先生は２０代の十年間、詩を書く勉強会に参加していました。講師は玉本格さんという詩人です。その勉強会には、「太陽の子」を書いた「灰谷健次郎さん」も参加していました。その当時、灰谷さんは神戸で小学校の教師をしていました。「灰谷君の詩は、情緒があった。若い頃からうまかったな。」と岸本先生は語ってくれたことがあります。同じサークルに参加していた先生に聞くと「岸本君の詩は理屈ぽっかったな。灰谷君はいずれ教師をやめて、文を書く仕事をするんじゃないかなと思っていたよ」と語ってくれたことがあります。勉強会で出していた「詩集」も見せてもらいました。ガリ版作った表紙がやぶれかけている小さな冊子に岸本先生と灰谷先生の名を見つけたときは、感慨が深かったです。

詩の創作の中で、文章を簡潔に書く習練を行いました。徹底して無駄な言葉や余分な表現を削除する訓練を受けました。おかげで、言語感覚が鋭くなってかったるい表現はどんどん直されたそうです。「講師の先生に、君の詩は冗漫だ。とよく注意されたな。」と岸本先生は笑っておられました。

※ 予告「来月で、この連載は終わります。岸本実践を生かすにはという題です。」

※知的生産術をもっと知りたい方は「岸本裕史１００マス先生の遺言」（清風堂書店）をお読みいただければ嬉しいです。